

生き神クマリ信仰から見る ネパール仏教

スダン・シャキャ

(種智院大学講師, 2012 年度 BARC 公募研究員)

目次

- 0. 調査の概要
 - 0-1. 調査の概要
 - 0-2. 調査記録
 - 0-3. 調査を終えての所感
- 1. はじめに
- 2. ネパールの生き神クマリの信仰
 - 2-1. 現在のクマリ制度と社会的役割
 - 2-2. 生き神クマリの日常と神秘的体験
 - 2-3. 選定基準
 - 2-4. クマリとなる女性の一生における三つの時代
- 3. 生き神クマリの信仰と起源
 - 3-1. ヒンドゥー教の起源
 - 3-2. 仏教文献からみる起源
 - 3-3. 国王とタレージュ女神の伝説
- 4. まとめ

【キーワード】: クマリ信仰の現状 生き神クマリ ネパール仏教 地域信仰

0. 調査について

0-1. 調査の概要

ネパールは仏教の開祖釈尊のふるさとであるが、現在では仏教徒が少数派となり、人口の大半はヒンドゥー教徒である。一方で、仏教文化はネパールを代表する宗教文化の一つであり、かつ多数派であるヒンドゥー教と共存していることも注目されている。クマリ（正確には kumārī クマーリー）という生き神に対する信仰は、ネパールにおける仏教徒とヒンドゥー教徒の共存の象徴である。さらに、ネパールにおける仏教は、大きく分けて①テラヴァーダ仏教、②チベット系仏教、③ネパール仏教という三種がある。十三世紀初頭に滅んだインド仏教はカトマンズ盆地のバハー、バヒーと呼ばれている仏教寺院を中心に今日でも伝承されているが、これが③ネパール仏教であり、ネワール人が担い手となってネパール固有の仏教である。

本研究では、「生き神クマリ信仰」という視点を通じて、近年の社会構造の変化に伴って生じた新たな課題の調査をし、ネパール仏教とそれに基づく文化の現状を明らかにする。

0-2. 調査記録

本研究では文献・現地両面からの調査を実施した。文献研究は日本国内の研究機関を中心に行い、一方、2013年3月18日から24日までネパール特にカトマンズ盆地のバハー、バヒーと呼ばれている寺院において現地調査を実施した。その際、地元の僧侶や有識者への聞き取り調査も行った。同時にネパールに流布している、仏教及びクマリに関する文献も収集した。

0-3. 調査を終えての所感

まずは2012年度BARC公募研究員としてネパールの生き神信仰に関する研究を行うことができたことに感謝をしたい。

生き神クマリ信仰はネパールに現存する生き神信仰を代表するものである。そして、その信仰の起源およびその現状を明らかにすると同時に、それを通してネパール仏教とネパールにおいて多数派を占めるヒンドゥー教との関わりを考察することができた。

仏像・仏画として可視化したクマリ女尊と生き神クマリは仏教とヒンドゥー教では異なった起源を有す。今回の研究において、クマリ女尊の起源を文献的に裏付けることに至った。しかし、それが生き神クマリにどのように転換したのかを、明らかにするため「国王とタレーージュ女尊の伝説」に関してさらに文献・現地調査の必要があると思われる。

何よりも、ネパールにおいて宗教の教義を超えたところに生き神クマリ信仰が 200 年以上続いてきたことに感銘する。これはネパール仏教の特徴であり、ネパールの宗教文化の土台であると感じた。

今回の研究調査の成果の一部として「生き神クマリから見るネパール」を題とするワーキング・ペーパーにまとめた。

生き神クマリ信仰から見る ネパール仏教

スダン・シャキヤ

1. はじめに

ネパールは四種族と三十六民族によって構成された美しい庭園である。これは統一ネパールのシャーハ王朝の初代王プリティヴィーによる名言である。彼はゴルカ（Gorkhā）というカトマンズ盆地の北西に位置する小さな国の王で、いわゆるグルカ兵の勇力を以て全土の統一ネパールに成功した。そして、それぞれの言語を持ち、独自の文化・宗教を有している国民同士の調和を目的として冒頭の言葉が呼びかけられたのである。

本稿で取り上げる生き神クマリと、上述したプリティヴィー王の結びつきは注目すべきと言える。統一ネパールを創るにあたり、シャーハ王は1768年のクマリの祭りの日にカトマンドゥ市を征服した。そして、当時のカトマンドゥ王国の慣例に従い「征服した敵国」の生き神クマリを崇拝し、祝福を受けたという。生き神クマリの祝福を受けるというのはその一年間同国の王として認められることを示す。そのため、シャーハ王朝の王達は毎年9月のクマリの祭りの日「インドラ・ジャートラ」に生き神クマリのもとに祝福を受けに訪れる。この習慣はネパールで王制が廃止されるまで続いた。

2008年5月、ネパールの憲法制定議会で王制廃止宣言が採択され、長年続いた王制は幕を閉じることになり、王政が廃止された。それと共に、王と強い結びつきを持つカトマンドゥのロイヤル・クマリと同時にその他の地域のローカル・クマリの正当性が疑問視されはじめた。さら、政治、宗教、文化、人権など様々な側面からその存続意義が問われるようになった。そのおかげともいえるが、生き神クマリの信仰は世界でもまれに見るネパールを代表する宗教文化であることが人びとに改めて認識された。それ故、クマリ制度を維持しつつ、時代に合うようにクマリとなる少女の教育・生活面などをサポートする新たな対策がなされ、今「クマリ」は注目の的となっている。このようなクマリの信仰はいつから始まったのは定かにはなっていない。

そこで、本稿では、クマリ信仰の起源を踏まえつつ、現在のクマリ信仰を通して複雑な宗教と民族文化によって構成されているネパールの社会・宗教文化に見られる側面について考察しつつ、ネパール仏教との関わりを明らかにする。

2. ネパールの生き神クマリの信仰

ネパールの生き神クマリのことは最近の日本のテレビ等でも報道されることがある。「クマリ」は少女、児女、娘、処女と意味するサンスクリットもしくは現地のネパール・ネワール語 Kumārī

に由来する。「クマーリー」が正確な表記である。しかし、「クマリ」が既に広く知られているため、本稿でも「クマーリー」ではなく「クマリ」を採用する。

2-1. 現在のクマリ制度と社会的役割

ネパールにおいて、仏教家系の少女をヒンドゥー教と仏教のそれぞれの立場から生き神クマリ女尊として崇拝するいわゆる「生き神クマリ制度」がいつから始まったのかは定かではない。冒頭でも取り上げたように、プリティヴィー王がカトマンドゥ王国を征服した後、生き神クマリから祝福を受けたという歴史的な事実が伝えられている以上、少なくともマッラ王朝の時代（CE1380-1768）にはカトマンドゥ盆地に広まっていることが推測できる。

一方、ロイヤル・クマリが暮らす家屋「クマリ・チェ」(Kumārī-chen) [写真1] において、カトマンズのウォトゥ出身のヒラーマイヤ・シャキヤ (CE1865-1866) は一番古いクマリとして記録されているようである。それ以前も元クマリは存在したはずだが、名前や出身地・寺院は不明である。元クマリのヒラーマイヤ以降の14人目はマティナ・シャキヤで、2008年から生き神クマリとして崇拝されている。



写真1 クマリ・チェン—カトマンドゥ市の生き神クマリが暮らす家—



写真2 様々な生き神クマリ (Majupuria1993)

現在、カトマンドゥ盆地ではロイヤル・クマリとローカル・クマリを含め10の少女を生き神クマリとして崇拝している。ロイヤル・クマリとローカル・クマリ [写真2] は元々あった区別ではない¹。カトマンドゥ市の旧王宮広場ヴァサンプールのクマリ・チェンで暮らすクマリは今でもロイヤル・クマリとされ、王制の時代と同様に国家元首（大統領）が毎年クマリからの祝福を受けに訪れる。それ以外の地域のクマリは現在ローカル・クマリと位置付けられ、地域の祭りなどの宗教行事に姿を見せる。

生き神クマリは2008年に王制が廃止されて以降も護国神、無病息災など様々な現世利益を与える守護神、救済者として信仰されている。生き神クマリを信仰する者にとっては、クマリを目の

¹ [Allen: 12] を参照。

当たりにすることは「神」そのものを目の当たりにすることである。これは俗世界にしながら聖なる世界の「存在」を観ることができるといふ不思議な体験であろう。クマリとなった少女の身体を媒介して、彼女の身体に宿る聖なる世界の「存在」すなわち「神」を現実的に「観る」ことが可能となる。その場合の聖なる存在「神」はヒンドゥー教徒にとってはドゥルガー (Durgā), カーリー(Kālī), タレージュ(Taleju)等の女尊であり、仏教徒にとってはターラー(Tārā), ヴァスダーラー(Vasudhārā)などの女尊である。一少女を二つの異なった宗教が異なった神として信仰・崇拜しているのである。



写真3 生き神クマリを載せた山車

生き神クマリの信仰あるいは文化は、仏教徒、ヒンドゥー教徒の社会に広く浸透している。この生き神クマリは九月の「クマリ祭り」(インドラ・ジャートラ Indrajātrā) [写真3] などの祭りを含め、年に十数回のみ公に着飾った姿を見せる。

ネパール社会において生き神クマリの行動はきわめて重要な位置を示している。クマリに選ばれた少女は「生き神」と同時にひとりの「人間」でもある。そのために、社会全体が「生き神クマリ」となった少女を大切に「崇拝しながら育てていく」のである。

2-2. 生き神クマリの日常と神秘的体験

「生き神」に選ばれた少女は「神」として毎日供養 (pūjā) されている。クマリは常に赤い衣服を身につけ、額が赤く塗られ、その赤い額の中心に「眼」を付けている。そして、生き神クマリになると周囲は当然ながら、両親家族でさえも彼女をデオマイジュ (Dyomaijyu 神の娘さま) と呼ぶ。なお、クマリは初潮を迎えるとその任務を終える。

クマリの日常生活

生き神クマリに選ばれる少女は基本的に家族と離れて「クマリ・チェン」(クマリの住居)で、親代わりの世話人と暮らす。しかし、すべてのクマリがこれに従っているわけではない。ほとんどの地域の生き神クマリいわゆるローカル・クマリは普段は普通に家族と暮らし、宗教行事・儀礼の際のみクマリ・チェンでクマリとして暮らす。カトマンドウのロイヤル・クマリは旧王宮広場にあるクマリ・チェンで家族と離れ、厳格な戒律の中で暮らしている。ロイヤル・クマリの生活空間はクマリ・チェンが中心であり、特定の日以外そこを出ることはない。生き神クマリの生活する空間ゆえに「クマリ・チェン」は一つの聖域となっている。その聖域であるクマリ・チェンには海外からの観光客も訪れる。赤い服を身につけ、額に第三の眼のある少女は一瞬とはいえ、窓から顔を出してくれる。その瞬間、皆静かに手を合わせる。その時の生き神の撮影は固く禁じられている。

クマリの日常はローカル・クマリとロイヤル・クマリとでは異なる。ここでは1984年から1991年までカトマンドウの元ロイヤル・クマリを務めた **Rashmila Shakya** 氏(ラシュミラ・シャキヤ)への聞き取り調査よりまとめたものを紹介する。

上述したように、クマリの生活空間であるクマリ・チェンは一つの聖域であるため、それが神が宿る寺院であると言えよう。一方、クマリに選ばれた少女の日常はどのようなものであろうか。これについても元ロイヤル・クマリ自身が『告白本』² [写真4] に示している。筆者が本人から直接聞いた内容をここでは簡潔にまとめる。

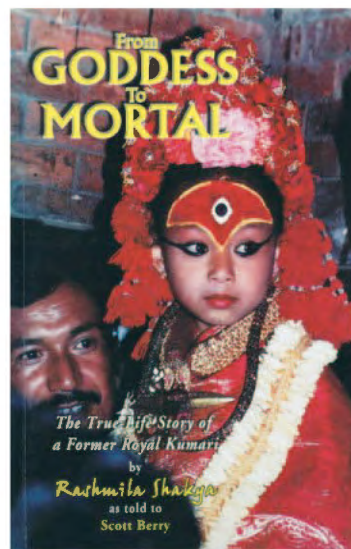


写真4 元クマリ Rashmila の告白本の表紙

クマリの一日は着飾りから始まる。クマリは常に真っ赤な衣服を着用し、額を赤く塗り、第三の眼として眼に象った金属を額に付ける。アーサナ (āsana) と呼ばれる決まった座に座ると、少女に「神」が宿り³、生き神になると信じられている。このように神となったクマリの下に毎朝ヒ

² *Rashmila Shakya From Goddess to Mortal Kathmandu, 2007*

³ クマリは「生き神」と言ってもいつでも、「神」になっているわけではない。つまり、常に神として

ンドゥー教と仏教の供養儀軌が行われる [写真 5]。



写真5 パタン市の生き神クマリに供養儀軌を行う僧侶たち

まずはヒンドゥー教の祭司であるバラモンがやって来て、ヒンドゥー教の儀礼次第に基づいて「日常供養」すなわち供養儀軌が行われる。この場合の少女はドゥルガーであり、カーリーでありタレージュ、それはつまり、ヒンドゥー教の女尊として崇拝されているのである。そして、バラモン祭司と入れ替わりで、次に仏教の僧侶ヴァジュラアーチャーリヤがやってきて仏教に基づいた供養儀軌を行う。この場合の少女はターラーやヴァスダーラーや金剛女のように仏教の女尊として崇拝されているのである。

以上のように同じ生き神クマリに対する日常供養儀軌は、ヒンドゥー教と仏教ではそれぞれ異なった修法に基づいて行うことが明らかである。これは一日の中で、クマリ・チェンで行われる重要な儀軌である。

これが終わるとクマリが朝食を摂る。また、参拝者がやってくると再びアーサナに座して、「神」となり、供物などを受け取る。それが終わると、また普通の少女のように勉強をしたり、遊んだりする。

上述したように、生き神クマリは基本的に外出ができないため、それまで通っていた学校から教師が派遣されるようである。元クマリの **Rashmila** 氏によると、この期間の勉強は形式的なものであり、還俗後は勉強について行けなくて大変苦労したという。そのような自らの苦い経験から、彼女自身の働きかけもあり、近年になってから、クマリは還俗時に学校などに適応できるように任命された時点から任務終了後まで一般の教育が受けられるように配慮されている。具体的には、学校から教師が毎日派遣され、学校と同様にテストなどを行い、進級もできる対策をとったという。ネパールの学校では小学校から落第制度があり、年齢に応じて進級することがない。

元クマリの神秘的な体験

元クマリの体験では、実際に神が宿ること、すなわち「憑依」が起こるのは、着飾ってナーガ

「憑依」しているわけではない。ただし、いつでも神になれる性質を有する身体を持っている訳である。クマリは意識的に自らが神のところへ行くのでもなく、自らが神を呼び寄せることもない。クマリは神を宿す身体であり、あくまでも一つの『媒体』もしくは『器』に過ぎないのである。

(蛇)の形の首輪をつけた直後であるという。これをネワール語では「デオワイグ」*dya-vaigu*⁴という。この蛇の首輪は、九月に行われるクマリの祭りインドラ・ジャートラなど特定の日にのみに身に着けるものである〔写真6〕。

元クマリ *Rashmila* 氏の話によると、七年間のクマリ生活の中で普段は自分では、それほど不思議な体験をすることがなかったが、ナーガを身に着ける時は不思議な神秘的な力を感じるという。



写真6 額に第三の眼及びナーガの首輪を着用するロイヤル・クマリ

一般的の子どもなら、朝食が遅れたら泣くであろう。まして朝から晩まで食事を与えないと空腹のため泣き叫ぶであろう。インドラ・ジャートラ祭りの時には、クマリは宗教行事に関わる僧侶達皆と共に朝から断食を始める。これは場合によっては夕方の行事が終わるまで続く。しかし元クマリの *Rashmila* 氏によると、ナーガの首輪の着用時は空腹感もなく、疲労もないという。また、彼女の母親は、祭りの際にナーガの首飾りを着けている時、自分の娘が本当の神のように見え、自然に手を合わせて礼拝したくなるオーラを放って不思議な顔立ちになると言う。

生き神としてのクマリを信仰する者にとっては、クマリの身体を媒介しているそこに「憑依」している神をリアルに観ることが可能となる。ヒンドゥー教徒にとってはそれはドゥルガー、カーリー、タレージュ女神であり、仏教徒にとってはターラー、ヴァスダーラー女尊である。すなわち、それは、聖なる世界のものが世俗の世界にやってくることを目の当たりにすることとも言える。大げさに言えば、生きクマリは国家が認めているシャーマンとも言えるであろう。同時にクマリはネパールにおいて信仰・社会が育ていく貴重な「宝」ともいえる。

2-3. 選定基準

クマリは厳格な条件の中で選ばれる。ここでは、カトマンズのいわゆるロイヤル・クマリを選定する際の条件とされる主なものを紹介する。

- ①釈尊の子孫として知られる、仏教徒のシャークヤ (*Śākya*) 家系に生まれた 3, 4 才の少女であること

⁴ *Dya-vaigu* はネワール語であり、*dya* とは神 *deva* のこと、*vaigu* はやってくるということであり、神が宿ることである、いわゆる憑依のことである。

- ②斜視でないことや歯が落ちてないこと
- ③怪我や身体にあざなどがないこと
- ④心身共に丈夫なこと。いかなる恐怖にも耐えられること⁵
- ⑤国家元首と相性が合うこと⁶

これ以外の条件としては仏の身体のように三十二相を備えていることも取り上げられる。しかし、現代世界において、一般の生身の人間が足の裏が平であり、地面に密着し、あひるのような指の間に水掻きがあること等の仏の種々の特相が備わっていることはまずは不可能であり、それはあくまでも理想とされる条件であろう。何より重要なのは上記のように生き神に選出される少女はシャーキャ家系であり、尚かつ内面的にも外面的にも美しく、丈夫であることであろう。このような、条件を満たした少女は、政府認定の選定委員会によって承認されると様々な宗教儀礼を経て「生き神クマリ」となる。

一方、ロイヤル・クマリの選定条件は基本的にローカル・クマリにも適用されるが、地域差が認められる。例えば、パタンのクマリは仏教徒のシャーキャ家系からではなく同じ仏教徒で僧侶カーストのヴァジュラアーチャーリヤ (Vajrācārya) 家系から選ばれる。

こうして選ばれた「神」の行動は予言、占いの対象となる。クマリが体調を崩せば、国家または国家元首に災いが降りかかるといわれている。また、日常供養儀軌などの宗教儀礼中に機嫌を損なうような出来事があれば、儀礼の責任者の周辺に不吉なことが起こると信じられている。特にロイヤル・クマリは微笑むことも不吉の予言とされていたが、最近は笑顔を浮かべた写真もしばしば見られるようになっている。生き神クマリに選ばれた少女は神秘的な力を持続しながら世俗世界を見守ると同時に世俗と共に成長していくのであろう。

2-4. クマリとなる女性の一生における三つの時代

「生き神」として選ばれた少女のその一生を見ると、彼女は一生の間に三つの時代を迎えることになる。それは以下のようにまとめられる。

①人間-1 (ひと) → ②女尊 (生き神クマリ) → ③人間-2 (『ヒト』)

①ごく普通の家庭に人間として生まれる「ひと」であり、仏教徒である。

②さまざまな条件を満たし、宗教儀礼に基づいて「生き神」に選定される。この場合、クマリに選ばれる少女は彼女自身の意思よりも親や親族の意思の影響が強い。クマリの身体は神の宿る「器」であり神秘的存在である。人間の社会にいらながらも仏教の女尊であり、ヒンドゥー教の

⁵ 10月頃行われる秋祭りダシャイン (Daśaim) というドルガーまたはタレージュ女尊を供養するヒンドゥー教の祭りがあり、その際 108 頭の水牛の供犠を行う。これらの犠牲祭も恐れることなく直視できることが条件の一つという。しかし、元クマリは必ずしもそうではないという。

⁶ ネパールでは生れた直後、僧侶もしくは占星術師が星占いに基づき生年月日と共に星座などの「記録」を作る。これは「ジャータ」(jāta, ネパール語) またはチンノ (Chinno, ネパール語) と呼ばれ、結婚 (相性判断) など人生の節目のような通過儀礼を行う吉日を決めるために用いる。これは仏教・ヒンドゥー教を問わず基本的に皆が有するものである。

特に女性が結婚する場合、「シャータ」を嫁ぎ先の家族に託す。これは女性が生まれ育った家を離れて新しい家で暮らす事いわゆる結婚の象徴でもある。同様に、人が亡くなると、その人の「ジャータ」も遺体と共に火葬され、良い生まれ代わりを願うのである。こうした生年月日の記録を留めている一枚の紙ではあるが、これはネパール社会においてきわめて重要な意義を持つ。

女尊でもある。

- ③「神」としての神秘的な体験を有する『ヒト』である。この『ヒト』もまた二種に分けることができる。

(a) クマリとしての任務を終えると還俗し、一般の人びとのように結婚し家庭を持つことが多い。しかし、元クマリと結婚すると夫が早死するといういわれがある。しかし実際には、元クマリたちは家庭を持ち、母親、祖母となっている人もいる。

(b) クマリの任務を終えても、「神」を宿す性質は持続できるため、一生「生き神」のまま生活する人もいる。現在パタン市においては、地域の現役のクマリと元クマリの両方が「生き神」としての崇拝の対象となっている〔写真 7〕。



写真 7 アーサナに座するパタン市の元クマリ

以上のように、生き神クマリに選ばれた少女の宗教的な立場は以下のように変化を遂げると考える。

仏教徒 → 仏教徒+ヒンドゥー教徒 → 仏教徒

人間として生まれた少女はある一定の期間神が宿る「器」なり、生き神としての崇拝の対象となる。そして、「器」としての資格を失ってしまうと再び「人間」に戻る。この場合の人間は一般の家庭に生まれ育った少女とは外見上全く変わらないとはいっても、崇拝の対象となり神秘体験をした彼女に対して家族や親戚の見る目は特別である。元クマリ **Rashmila** 氏に対しても家の中ではデオマイジュと呼ばれ、尊敬語が使われている。本来デオマイジュとはクマリに対する呼び名のままであるが、還俗後もそのまま続けているのである。また、食事に関しても、元クマリに特に鶏肉を食べさせないように配慮しているようである。ネパール仏教の僧侶ヴァジュラアーチャーリヤたちは基本的に鶏肉、鶏の卵を食べることをタブーとされ、クマリの期間中も食べないという。それが、還俗後も続いているようである。

一方、元クマリ **Rashmila** は家から一歩外へ出ると友達や会社の中で特別に扱われることなく、一般の女性として生活している。現に、彼女は今では一般企業ではコンピュータ技師として働き、ごく普通の生活を送っている。

3. 生き神クマリの信仰と起源

既に述べてきたように、ネパールに現存する生き神クマリの信仰の起源は定かではないが、遅くとも 18 世紀中頃には流布していることが明らかである。そこで少女を媒体とする「生き神クマリ」の起源について述べる前に尊格として仏像・仏画の形で可視化した「クマリ女尊」の起源について仏教とヒンドゥー教の文献を通して考察する。クマリ女尊に関する儀礼クマーリー・プージャー (Kumārī-pūjā, クマリの供養儀軌で、以下女尊クマリ・プージャーと表記する) は古くからヒンドゥー教と仏教で行われていることが文献で確認できる。その一部をここで紹介する。

3-1. ヒンドゥー教の起源

インドにおいて古代から 10～12 才の少女をヒンドゥー教のカーリー (Kālī) という憤怒尊の化身として崇拝する習慣があり、種々のクマリ・プージャーに関連する文献が存在する⁷。例えば、16 世紀の文献 *Yoginītantra* の第 16 章ではカーリー女尊の出現について、そして第 17 章ではカーリーとしてのクマリ女尊の供養儀軌について述べている。この場合、カーリー女尊はヒマラヤの少女ウマ神としても崇拝されているようである。⁸

これにより、少女をカーリー女尊の化身クマリとして崇拝するいわゆる生き神崇拝は、遅くとも 16 世紀頃インドでは定着していることになる。では、カーリーとはいかなる女尊であろうか。

『デーヴィー・マーハートミヤ』からみる起源

ここで、7 世紀頃成立の『デーヴィー・マーハートミヤ』(*Devīmahātmya* 女尊の素晴らしさ) を取り上げる。⁹この聖典を以てヒンドゥー教の女尊崇拝の歴史が始まるとされている。そこに種々の女尊が誕生し、神々の敵、または人間の敵である魔神を打ち下すという流れを汲む。その主人公は血を飲む美しき女尊ドゥルガーである。



写真 8 魔神を殺すドゥルガー女神
(『デーヴィー・マーハートミヤ』所説の図版、ネパール国立古文書館 [Mori 1995])



写真 9 魔神を征服したカーリーとドゥルガー女神
(『デーヴィー・マーハートミヤ』所説の図版、ネパール国立古文書館 [Mori 1995])

⁷ 詳しくは [Goudriaan: pp.81, 86,180] を参照。

⁸ [Goudriaan: 180] を参照。

⁹ 詳しくは立川その他 1986: 130-148. また, [Mori 1985] にはネパールにしている『デーヴィー・マーハートミヤ』の絵解きが紹介されている。

既に取り上げたように、ネパールの生き神クマリに宿るドゥルガー (Durgā) やカーリー (Kālī) 女神であるが、それらの女神は『デーヴィー・マーハートミヤ』に由来する。

ドゥルガー神はヒンドゥー教において最もよく知られる女神である。ドゥルガー女神は穏やかな美しい顔で描かれながらも、水牛の魔神を殺す女神という恐ろしい姿をとる。『デーヴィー・マーハートミヤ』によると、魔神に打ち勝つために主要な男神たちから与えられたその力と武器を結集して誕生するのはドゥルガー女尊である。そのために複数の手に種々の武器を持している。同様にカーリー女尊は『デーヴィー・マーハートミヤ』の中では、ドゥルガー女尊が敵の魔神と戦っている時、女尊の顔から生まれたと伝えられている。魔神は切られ、傷口から流れた血が大地に触れるそこから次々と新たな魔神と同等の力を持つものが生まれるのであった。そこで、カーリー女尊がその敵である魔神の傷の流血が地面に落ちる前に吸い取って殺したという [写真 8, 9]。

ドゥルガー、カーリーの女神は正義の味方とされ、後に力を象徴する女尊として広く信仰されるようになった。それ故、動物・鳥類の供犠による「生の血」がドゥルガーまたはカーリー女尊に対する最高の捧げものとなったのである。動物または鳥に化けて魔神が女神と戦ったので羊、水牛、あひる、鶏などは悪の象徴とされるようになった。そして、ドゥルガー女尊を祀る最大の秋祭りは Durgā Pūjā や Daśaim 等と呼ばれ、秋 (10 月上旬頃) にインド、ネパールを含む広い地域で行われる。これはヒンドゥー教徒にとっても最大の祭りであり、ネパールでも広く普及している。



写真 10 カトマンドゥ市のタレージュ寺院

既に述べたように、ネパールの生き神クマリはドゥルガー、カーリー女尊の化身である。タレージュ女神¹⁰とはヒンドゥー教のドゥルガー女尊と同視化されている。それで秋祭りにカトマンドゥのタレージュ寺院 [写真 10] では動物の供犠祭が行われ、動物の生血を女尊に捧げる。生き神クマリに直接捧げることはないが、クマリが供犠する現場に出席するという。

¹⁰ このタレージュ Taleju とはネワール語タレーデオ (tale-dyo 上階に住む尊格) に由来する言葉であるという説もある。現にカトマンズ盆地のタレージュ寺院は周囲の建物より高く、その上階にドゥルガーの化身としてのタレージュが祭られている。

[tale-dyo (ネワール語, 上階にある尊格) → taleju]

供犠祭では、複数の水牛や羊の頭が鋭い刃物で切り落され、並べられる。このような光景を直視しても取り乱さないのが生き神クマリであり、そのためにクマリ選定の基準に「獅子のような胸を有するもの」が含まれているのである。

母神としてのクマリ

『デーヴィー・マーハートミヤ』では魔神を打ち勝つために、ブラフマン、シヴァ、クマール、ヴィシュヌ、インドラなどのシャクティ（エネルギー）たる女尊たちの身体から飛び出し、彼らと同じ装身具と乗り物を備える。これが七母神(Saptamātrkā)¹¹の誕生である。七母神の中にカウマリー (Kaumārī) 母神も含まれるが、これはクマリ女尊と同視化される。そのために生き神クマリも七母神または八母神 (Aṣṭamātrkā) の一人としても数えられている。

ヒンドゥー教を起源とする七母神または八母神はネパールの仏教にも取り入れられている。State University of New York が保管されている写本 (IASWR *Aṣṭamātrkāpūjā* MBB-1972-136) には、『八母神の供養儀軌』 (*Aṣṭamātrkāpūjā*) の文献が存在する。そこでは、クマリ女尊の姿に関して、赤色で、孔雀を乗り物とする四面一臂 [写真] という説明がなされ、上述してきたヒンドゥー教の姿と類似する。¹²また、クマリを三つの眼を持つ者として説いている。現在ネパールで崇拜されている生き神としてのクマリも第三の眼をつけることは注目すべき類似点である。



写真 11 一面三眼四臂のクマリ女尊 (ルビン博物館)

さらに、ネパールの National Achieves では CE1280 年 4 月 (NS400 Bachalā amāi) に書写された『クマリー供養の簡略儀軌』 (*Kumārīpūjāsaṃkṣiptavidhi*) と題する写本が保管されている。

¹¹ [立川その他1986:149-150] を参照。

七母神はクシャナ朝に存在していたという。そして、『デーヴィー・マーハートミヤ』で初めて登場する。それによれば、七母神はドゥルガー女神を助けて水牛の姿をとる魔神を殺すのである。この場合の七母神とは *Brahmānī*, *Rudrānī*, *Kaumārī*, *Vaiṣṇavī*, *Vārāhī*, *Indrānī*, *Cāmuṇḍā* の七女神である。それに *Mahālakṣmī* を加えて八母神とする。この八母神の方がネパールではよく知られている。

¹²また、孔雀を乗り物とする、一面四臂のクマリ女尊については *Matsyamahāpurāṇa*, *Devīpurāṇa* など多くのプラーナ文献に説かれている。

これはネワール語とサンスクリット語が混在する写本である。そこにはクマリ女神は八大母神に含まれている。¹³これにより、13世紀頃すでにネパールにおいて、とりわけネワール社会において、クマリ女尊を八大母神の一人として認識していることが明らかである。

以上のように、7世紀頃成立したとされているヒンドゥー教系の文献『デーヴィー・マーハートミヤ』は女神崇拝の始まりを示すものである。そこで魔神との戦いの中で、ドゥルガー女尊を助ける形で登場するのがカーリー女尊である。今でもそれらの女神はネパールの生き神クマリに宿るものであり、秋の祭りに動物や鳥類の生血を捧げられるのである。

クマリ女尊を八母神の一女神とする儀礼が13世紀の文献に存在することに注目したい。これによって、ネパールではクマリ女神の崇拝は遅くとも13世紀には普及していたことが示される。一方、少女をカーリー女尊の化身として崇拝するいわゆる生き神を崇拝する習慣は16世紀頃にはインドでは定着しているようであり、ネパールのヒンドゥー教をその影響を受けた可能性が高いと言える。

3-2. 仏教文献からみる起源

ヒンドゥー教の文献と同様に仏教においてもクマリ女尊を供養する儀礼「クマリ・プージャ」が行われている。『クリヤーサングラハ』(*Kriyāsāṃgrah*)はその一例である。これは寺院建築に関する成就集であり、ネパール出身の学僧クラダッタ(*Kuladatta*)が12世紀頃著した文献である。この文献の第二章にクマリの供養儀軌に関する言及がある。

ここでは寺院を建立する地面の選定後に地面を整える儀軌が説かれている。地面を九つの四角に分けてから阿闍梨が観想の中で「女尊」に対してその地面の吉凶を判断してくれるように請願する。もし、その地面に遺骨などの不純物があれば取り除く必要がある。ここでの女尊が他でもなくクマリ(*Kumārī*)である。¹⁴また、同文献の第八章では、マンダラの破壇作法の際にもクマリ女尊の供養儀軌の言及がある。¹⁵

『クリヤーサングラハ』にも説かれているように、マンダラなどを建立して行う多くの仏教儀礼には決まって「マンダラ破壇作法」が現存する。これは儀礼の終結を示す重要な儀礼である。ネパールで現在執り行われている多くの仏教儀礼において「儀礼の集結」を示す形で、「クマリ供養儀軌」が執行される。¹⁶この際、寺院に祀られているクマリ女尊の像を対象とする場合もあれば、生き神クマリそのものを対象とする場合もある。信仰対象として現在クマリ女尊と生き神クマリの間では区別をしないとされるが、詳細に調査することを今後の課題とする。

ネパールではヴィクラム歴のバードラ月(*Bhādra*, 西暦の八月～九月)もしくはマーガ月(*Māgha*, 一月～二月)にヴァスダーラー・ヴラタ(*Vasudhārāvratā*)と呼ばれる福德財宝を司る

¹³ 詳細は[Tamot 2007]を参照。

¹⁴ [梵語仏典: 195-197], [Rani 1977: 6b, 7a], [Tanemura 2004: 19, 40]を参照。

¹⁵ Rani 1977: 137b3-4

¹⁶ 現在ネパールの仏教徒の間で現存する十種の通過儀礼の中で、出家儀礼、結婚儀礼(*ihī* イヒー、神との結婚、実際の結婚)などは数日かけて行われている。それらの儀礼を終結する形としてクマリの供養儀軌を行う。同様に「ヴァスダーラー・ヴラタ」でもクマリの供養儀軌が儀礼の終結を表す。[Shakya1994: 68-69]

ヴァスダーラー（Vasudhārā）¹⁷女尊の供養儀軌祭が開催される。その儀軌祭の最後の日に、数百人にのぼる参加者はパレードを組んで、その地域で崇拝されるヴァスダーラー寺院を巡礼し、食べ物、金貨、華、穀物（稲）などの供物を捧げる。首都圏のパタン市で開催される場合、パタンの生き神クマリも崇拝の対象となる。これは生き神クマリをヴァスダーラー女尊と同一視しているからである。興味深いことに、ネパール独自に発展した三面六臂のヴァスダーラー [写真 12] の三面のうち、左の面はクマリ女尊である。¹⁸



写真 12 三面六臂のヴァスダーラー女尊

仏教徒のシャーキャ家の少女を「生き神クマリ」として崇拝の対象とする習慣はいつから始まったのは定かではない。しかし、13 世紀に成立した『クリヤーサングラハ』にクマリ女尊の供養儀軌が説かれているところから、仏教においてクマリ女尊に対する崇拝は遅くても十二世紀に流布していたとも考えられ、その起源はヒンドゥー教のそれと異なっていることが明らかである。また、『クリヤーサングラハ』の流れを組むような形で、今日でもネパール仏教儀礼の中に「クマリ女尊の供養儀軌」は決まって取り組まれている。現在の儀礼の中で登場する「クマリ女尊」と生き神クマリも同一視されているようである。これは、いつから始まったのかは、今後の課題にしたい。

3-3 国王とタレージュ女神の伝説

以上述べてきたようにヒンドゥー教と仏教のクマリ女尊は異なった起源を有する。また、クマリ女尊の崇拝がどのように生き神クマリに展開したのかは明確ではない。また、シャーキャ系の少女にタレージュ女神が宿り、彼女を生き神として崇拝することが、いつからカトマンズ盆地において始まったのかも定かではない。これは「ある伝説」をもってひとりの仏教系の少女をヒンドゥー教と仏教において「生き神クマリ」として信仰することに至り、それは今日までも継承されているという。ネパールにおいて、クマリ女尊と生き神クマリの起源にまつわる様々な伝説が

¹⁷ ヴァスダーラーに女尊に関して [スダン 2011] を参照。

¹⁸ 詳しくは [スダン 2012: 55-57] を参照。

あるが、いずれの登場人物も王、タレージュ女神、シャーキャ系の少女の三者であるのは共通する。ここで最もよく知られている「ある伝説」を紹介する。

ある伝説:

カトマンドゥの国王は呪術力を持っていた。それを活用して宮殿の一角でタレージュ女神と二人で毎日さいころゲームを楽しんでいた。その中の一つの決まりとして、王が女神を絶対直視しないこと、直視しようと思わないことがあった。そのため、声だけでやり取りし、対面することがないようにゲームはカーテン越しで行われていた。それによって、タレージュ女神がカトマンドゥ国の護国神となり、国・国民に平和と繁栄がもたらされた。

ある日、王は自分の好奇心に絶えず、カーテンの向こうの真の本当の姿をカーテン越しに覗こうと思った。それを察知したタレージュ女神はゲームを中止し、直ちに姿を消す。そして、王に対して女神は次のように告げる。

「王よ、あなたは約束を破った。私はもう二度とあなたの宮殿に行かないし、さいころゲームもしない。今後は、私はあなたの民のシャーキャ系の少女の身体の中に現れる。私を崇拝したければ、私の姿を見たければ、その仏教徒のシャーキャ系の少女を選びなさい。私は彼女の身体に私の化身クマリ女神として宿るから、その少女を私とみなせば良い。そうすれば、あなたの国・民の平和と繁栄は保たれるであろう。」

王は自分の行為に後悔するが、早速タレージュ女神のお告げ通りシャーキャ系の少女を女神の化身として崇拝し始める。これがネパールにおける生き神クマリ信仰の始まりである。

上記の伝説に登場する王さまはカトマンドゥ国のマッラ王朝（CE1380-1768 年）の最後の王ジャヤブラカシュ（18 世紀）である、または別の王であると言った諸説が存在する。また、別の伝説によれば、11 世紀のラクシュミーバルマン王が財宝を求めてパタン市に来てシャーキャ系の少女をクマリとして供養し、寺院を建立したという¹⁹。

以上のようにクマリ女神と生き神クマリの信仰を結びつけるのは「国王とタレージュ女神の伝説」のみであるが、起源については今後更なる調査を要するであろう。

4. まとめ

ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教の宗教間で、尊格たちが行き来することは珍しいことではない。周知の如くヒンドゥー教において釈迦牟尼仏陀をヴィシュヌ神の第九番目の化身とすること、また仏教において釈尊が悟った時の梵天勧請のエピソードはよく知られている。

上述したように、ヒンドゥー教と仏教にはそれぞれ独自のクマリ信仰が存在していた。それが時代の流れとともに変化を遂げている。そして「国王とタレージュ女神の伝説」をもって仏教系（現

¹⁹ [Wright 1877: 156-157] 及び [Allen 1996:15] を参照。

在でいうシャーキャ、ヴァジュラーチャールヤ)の少女を生き神クマリとして崇拝することに至ったのであり、それが今日までも継承されているのである。生き神クマリの始まりは明確ではないが、マッラ王朝の最後の王ジャヤプラカシュの時代には生き神クマリの信仰が既に定着していることが明らかである。よってネパールにおいて、遅くとも十八世紀頃には生き神クマリ信仰が始まっていると言える。一方、ヒンドゥー教や仏教の文献にはクマリ女尊がさらに早い段階に登場する点から、生き神クマリ信仰の起源もさらに遡る可能性が否定できない。

「生き神クマリ」の存在に関しては都市伝説のように誤解をされる部分も多くあり、さらに、ネパールの国内の中でもその存在の是非についての議論が持たれている。ネパールの歴史を見ると、その背景に当時の政治家たちの思惑も垣間見えるが、現在のこの生き神クマリ信仰は宗教共存、共生のシンボルとなっていることに異論はないであろう。そしてこれこそが今、ネパールの宗教文化の土台となっていると言っても過言ではない。それ故に、古き良き伝統を維持しながら時代に合う形の生き神クマリ制度の変化もやむを得ないであろう。

仏教の基本的な戒律では殺生がタブーであり、不殺生の思想が教義の核となるものである。また、ネパール仏教においてクマリ女尊または生き神クマリは、ヴァスダーラーやターラーのような財宝や救済を司る穏やかな表情の女尊とみなされている。一方、ヒンドゥー教、特に七世紀頃の女神信仰の発展につれ、ドゥルガー、カーリーのような多くの女神たちがエネルギーの象徴として登場する。特にドゥルガー、カーリー女神に対する最高の捧げものは供犠による動物・鳥類の生血である。つまり、殺生を容認していることになり、仏教教義とは明らかに異なるものである。

仏教側の立場からいえば、カーリー、ドゥルガーというヒンドゥー教の供犠を象徴する女神が仏教系の少女に宿るという信仰をネパールの仏教徒たちが受け入れたことになる。そうして、生き神クマリが代々継承されてきた。一方、ヒンドゥー教側の立場からいえば、長年にわたって、ヒンドゥー教の重要な女神の化身を、ヒンドゥー教の家系からではなく、わざわざ仏教徒の少女に求めている。このようなことが可能となった背景にはネパールにおいて宗教は教義より信仰・文化が重視されたことがあると考えられる。

このように、仏教教義の逆を象徴する女尊を仏教徒たちが受け入れ、またヒンドゥー教の重要な女尊を仏教家系に求めるというこのことは、ネパールにおけるクマリの寛容の象徴としての一側面であると考ええる。多数を占めるヒンドゥー教の社会の中でネパール独自の仏教文化を現在に至るまで維持保存できた善き智慧のひとつはネパールにおける生き神クマリ信仰ではないかと考える。

主な参考文献

- B. R. Vajracarya *Vajrayāna Pujāvidhi Saphu Patan*, 2008
- D. Wright *History of Nepal* Cambridge, 1887
- I. Majupuria & P. Roberts *Living Virgin Goddess Kumari* Craftsmen Press, Bangkok, 1993
- H. H. Wilson *The Matsyamahāpurāṇam* Part I-II, Nag Publishers, Delhi 1983
- Kashi Natha Tamot *Kumāripūjā Saṃkṣepavidhi* Kathamandu, 2007
- Masahide Mori & Yoshiko Mori *The Devīmāhātmya Painting Preserved at The National Achieves Kathmandu* The Central for East Asian Cultural Studies for UNESCO, The Toyo Bunko, Tokyo, 1995
- Masakazu Tanaka & Musashi Tachikawa *Living with Śakti* National Museum of Ethnology, Osaka, 1999
- Mahendra Shakya *Vasudharādevī Chagu Adhyayana* Lalitpur, 1994
- Michael R. Allen *The Cult of Kumari : Virgin Worship in Nepal*, Kathmandu, 1975
- M.S. Slusser *Nepal Mandala Vol I-II*, Princeton Univ. Press, 1982
- Ludo Rocher *A History of Indian Literature The Purāṇa* Wiesbaden, 1986
- P. K. Sharma *Devī Purāṇam* Shri Lal Bahadur Shastri Kendriya Sanskrit Vidyapeeth, New Delhi, 1976
- R. Levy *Mesocosm: Hinduism and the Organization of a Traditional Newar City in Nepal*, Univ. of California Press, 1990
- Rashmila Shakya *From Goddess to Mortal* Kathmandu, 2007
- R. Tanemura *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā* Egbert Forsten, 2004
- S. Rani *Kriyāsaṃgraha* New Delhi 1977
- S. B. Ranjitkar *Kumari : The Virgin Goddess* Book Faith India, Delhi, 1999
- T. Goudriaan *Hindu Tantric and Śākta Literature* Wiesbaden, 1981
- Usha Dev *The Concept of Śakti in the Purāṇas* Nāga Publishers, Delhi 1987
- スダン・シャキヤ 「ネパールに生きる密教儀礼について」『密教資料研究紀要』第10号, 2008年
- 「ヴァスダーラー(Vasudhārā)女尊の関連文献について」『密教学研究』第43号, 2011年
- 「ヴァスダーラー(Vasudhārā)女尊の図像とその典拠について」『密教図像』第31号, 2012年
- 田中公明・吉崎一美『ネパール仏教』春秋社 1998年
- 立川・石黒・菱田・島『ヒンドゥー教の神々』せりか書房, 1986年
- 立川武蔵『女神たちのインド』せりか書房, 1986年
- 寺田鎮子「ネパールの柱祭りと王権 インドラ・ジャートラ」『ドルメン』第4号, 1990年
- 那谷敏郎『ネパールの生神様』, 平凡社, 1977年
- B. マッラ著 寺田鎮子訳『神の乙女クマリ』新宿書房, 1994年